

医療関係職種の養成教育における課題解決に資する研究
～あん摩マッサージ指圧師はり師きゅう師養成教育における遠隔授業の実態調査～

分担研究報告書（令和6年度）

研究分担者 松熊 秀明（森ノ宮医療大学 教授）

研究要旨

【目的】コロナ禍において、多くの教育機関で遠隔授業が導入された。しかし、あん摩マッサージ指圧師はり師きゅう師養成教育においては対面授業の重要性も高く、遠隔授業の適切な活用が求められる。そこで本研究は、遠隔授業の現状と課題を明らかにし、適切な活用方法を提案することを目的とした。

【方法】全国のあん摩マッサージ指圧師はり師きゅう師養成施設を対象に、遠隔授業の実施状況、導入効果、課題等に関するアンケート調査を実施した。

【結果】有効回答は68件（回収率72.3%）であった。全体の41.1%の養成施設で遠隔授業が実施されていた。遠隔授業は主に講義科目で導入され、実習科目での導入はなかった。分野別の導入率は、基礎分野、専門基礎分野の順で、専門分野での導入はなかった。遠隔授業の教育効果は、「どちらとも言えない」という回答が最も多かった。

【考察】遠隔授業の導入が限定的な理由は、実習・演習で実施されていないことから、実技指導の難しさ、また、学生の教育効果を計ることが難しい、教員のスキルの問題による教育の質保証等の課題があるためと考えられた。今後、遠隔授業の適切な活用を進めていくためには、教員のスキルアップを計りつつ、遠隔授業だからこそ得られる教育効果を確立させていくことが必要である。それによってあん摩マッサージ指圧師はり師きゅう師養成教育の質向上に貢献する可能性がある。対面授業でしか得られない学びの機会を損なわないよう配慮し、対面授業と遠隔授業を効果的に組み合わせ、学生にとって最適な学習環境を構築することが重要である。

キーワード：遠隔授業、あん摩マッサージ指圧師はり師きゅう師養成教育、教育効果、アンケート調査

A. 研究目的

新型コロナウイルス感染症の拡大により、文部科学省及び厚生労働省からの通知を受け、2020年度から2022年度まで、各養成施設では遠隔授業による授業が容認された。そして2022年5月に教育未来創造会議において「デジタル技術を駆使したハイブリッド型教育への転換」¹⁾が提言されたことにより、遠隔授業を積極的に取り入れた授業構成を行う学校が出現した。これに対し、2022年9月、医事課の要請により、公益社団法人全国柔道整復学校協会（以下、柔整学校協会）と東洋療法学校協会で協力して、遠隔授業に関する合同検討会を立ち上げて検討を重ねた。その後、2023年4月に医事課より、「「あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師及び柔道整復師養成施設における指定規則等の改正に関するQ&A」の一部改正」（以下、「Q&A」）が発出され、遠隔授業に関する7項目が追記された。その内容は、「対面授業に相当する教育効果を有すること」「同時かつ双方向に行われるか、毎回の授業に設問解答、添削指導、質疑応答等による指導を併せ行うこと」「学生の修学に不利益が生じないよう、適切に実施すること」等であった。

コロナ禍で実施された遠隔教育は、関係法令等にその定めもなく突発的に起きた情勢への対応による遠隔授業の早計な導入の結果、学生のモチベーション低下やコミュニケーション不足等により、教育の質の低下が指摘された²⁾。一方で、遠隔授業のメリットは、時間や場所の制約を受けず、繰り返し学習できる等の学習機会の拡大³⁾が報告されている。二連木ら⁴⁾は、柔道整復師養成課程において、柔道整復師以外に複数資格の取得を謳う大学では、必要な取得単位数が増大するため、特に複数資格取得を目指す学生の負担軽減を目的としてハイブリッド型教育の導入を提言した。しかしながら、他の専門学校を含む養成施設全般で、遠隔授業がどの程度活用されているかの実態は不明である。

これらの経緯から、遠隔授業の在り方と教育の質低下を防ぐための適切な遠隔授業の活用方法等を整理することを目的とし、あん摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師、柔道整復師、診療放射線技師、臨床検査技師、臨床工学技士の各職種で職種毎の特殊性を踏まえた上で、横

断的な課題の検討や、統一的な定義や在り方等について、各職種の学校協会や職能団体とともに整理することとなった。

そこで本研究の目的は、あん摩マッサージ指圧師はり師きゅう師（以下、あはき師）養成教育における遠隔授業の現状を把握し、適切な活用方法を提案することとした。具体的には、全国のあはき師養成施設を対象に、遠隔授業の実施状況、導入効果、課題等に関する実態調査を実施した。その調査結果を分析し、あはき師養成教育における効果的な遠隔授業の活用方法を、教育効果の最大化と教育の質保証の観点から定義・提案した。本研究の成果は、あはき師養成教育における認定規則等の見直しのための基礎情報として、次期改正が現状を踏まえたものとなるように活用されることを見込んでいる。

B. 研究方法

1. あはき養成における遠隔教育の実態調査

調査対象は、全国のあはき養成課程を有する全ての大学、専門学校94校とし、2024年度に在籍する全学年、及び開講されている全科目を調査範囲とした。回答者は、各養成施設の柔道整復師を養成する学科の学科長とし、複数の学科やコースを設置している施設については、学科やコース毎に回答を依頼した。

調査期間は、2024年9月10日から10月4日までとし、Google フォームを用いたオンラインアンケート調査を実施した。調査の依頼は、調査依頼状を学科長宛に郵送した。調査依頼状には、本研究が令和6年度厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）「医療関係職種の養成教育における課題解決に資する研究（24IA1801）」の研究の一環として実施される旨を明記し、研究の趣旨と目的について説明した。

アンケート調査票の具体的な質問項目は、図1に示した。また、本研究で用いる遠隔授業に関連する主要な用語の定義は表1に示した。

収集したデータは、まず各質問項目について単純集計を行い、各養成施設における遠隔授業の実施状況、活用形態、課題等の実態を把握した。

2. 遠隔授業の好事例収集

遠隔教育の実態調査にあわせて、遠隔授業の好事例の提供が可能な学校2校に、依頼した。好事例は、教員個人の取り組みと組織的な取り組みに分けて聴取した。

3. 倫理的配慮

調査対象者には、調査依頼状にて研究の目的、方法、データの取り扱いについて十分に説明し、調査への協力は任意であることを明記した。

本研究では、調査への参加、不参加によって回答者にいかなる不利益も生じず、調査内容は、教育に関する一般的な意見聴取を目的としており、回答者の精神的・肉体的健康に悪影響を及ぼす可能性のある質問や、プライバシーを侵害するような質問は一切含まれていない。これらのことから、人を対象とする生命科学・医学系に関する倫理指針（令和5年文部科学省、厚生労働省、経済産業省）が規定する「侵襲を伴わない研究であって介入を行わない」ことに加えて、個人情報を含まないことから倫理審査は不要であると本学倫理審査委員会に判断された。

C. 研究結果

1. あはき師養成における遠隔教育の実態調査

1) 有効回答と属性

有効回答は68件（回収率72.3%）であった。回答のあった養成施設のうち、3年制の専門学校が60件（88.0%）、4年制大学が8件（12.0%）、であった。

2) 学科・コースの現状（令和6年度の遠隔教育の実施状況）

遠隔教育を実施している施設は28施設（41.2%）であった。遠隔授業を実施している授業の割合は、28施設中「2割未満」が最も多く19件（67.9%）であった。分野別では、基礎分野で28件（100.0%）、基礎専門分野で27件（96.4%）、専門分野で0件（0.0%）であった。遠隔教育の導入にあたり、追加準備が必要であった設備について（複数回答可）、「インターネット環境」が16件（57.1%）で最も多く、次いで「周辺機器（マイク、カメラ等）」が14件（50.0%）であった。その他は、Microsoft Office 365、学習管理システム、WEB会議システム等が挙げられた。

3) 遠隔教育を最も実施している授業科目の実態

教育内容の分野は、「基礎分野」が最も多く、19件（67.9%）と次いで「専門基礎分野」が9件（32.1%）であった。授業科目は、「講義科目」が28件（100.0%）のみであった。遠隔教育の形式は、同時（リアル）配信型、オンデマンド型、ハイブリッド型、ハイフレックス型、対面+オンデマンド型のいずれにおいても、「実施していない」という回答が最も多かった。その他には、欠席者への対応として期間限定でのオンライン授業等が挙げられた。

教育の質の観点から、遠隔教育導入による影響について尋ねたところ、学生の授業内容の理解度、学生とのコミュニケーション、学生の学習意欲、教育の機会均等のいずれについても、「どちらとも言えない」という回答が最も多かった。反復学習については、「良い」と「少し良い」で17件（60.7%）、「どちらとも言えない」が9件（32.1%）であり、良いという意見が多くみられた。その他には、学び直しの社会人にとって繰り返しみれることで教育効果が高まる、学習意欲が高い学生には有効であるという意見があった。

学生の学習成果の評価方法について（複数回答可）、「対面試験（論述・口頭・客観試験）」が21件（75.0%）と最も多く、次いで「レポート提出」が13件（46.4%）であった。

次年度以降もこの授業をオンラインでの実施が良いと思うかについて、「そう思う」が13件（46.4%）であった。この授業以外にもオンライン授業を増やすべきかについては、「どちらともいえない」が9件（32.1%）と最も多く、オンライン授業の拡大には慎重な意見が多かった。

4) これまでに遠隔教育を実施し、学生の習得度に最も効果的であったと感じている授業科目の実態

遠隔教育が最も効果的であったと感じている教育内容の分野は、「専門基礎分野」が13件（46.4%）と最も多く、次いで「基礎分野」12件（42.9%）、「専門分野」3件（10.7%）であった。

授業科目は、「講義科目」が27件（96.4%）

と大半を占めた。遠隔教育の形式は、同時（リアル）配信型、オンデマンド型、ハイブリッド型、ハイフレックス型、対面+オンデマンド型のいずれにおいても、「実施していない」という回答が最も多かった。

教育の質の観点から、遠隔教育導入による影響について、学生の授業内容の理解度、反復学習、教育の機会均等については「少し良い」という回答が最も多かった。学生とのコミュニケーション、学生の学習意欲、「どちらとも言えない」という回答が最も多かった。

学生の学習成果の評価方法について（複数回答可）、「対面試験（論述・口頭・客観試験）」が22件（78.6%）と最も多く、次いで「レポート提出」が13件（46.4%）であった。

次年度以降もこの授業をオンラインでの実施が良いと思うかについて、「どちらともいえない」が10件（35.7%）と最も多かった。この授業以外にもオンライン授業を増やすべきかについて、「どちらともいえない」が8件（28.6%）と最も多く、「そう思う」「ややそう思う」が10件（35.7%）、「あまり思わない」「思わない」が10件（35.7%）と同数であり、オンライン授業の拡大に対しては意見が分かれるところであった。

2. 遠隔授業の好事例

遠隔授業の好事例について2校から提供があった。

1) 組織的取り組みの好事例

新型コロナ禍の状況により感染予防の観点からオンデマンド授業、リモート授業（リアル配信）、授業録画（欠席者用）を導入した。

① 目的

- ・主に社会人を対象に学修効果を高めることを目的にオンデマンド授業を行っている。
- ・新型コロナやインフルエンザなどの学生に対してリモート授業（リアル配信）、授業録画（欠席者用、復習用）を行っている。
- ・それ以外の病気や事情により欠席した学生に対して出欠は「欠席扱い」であるが、学修を円滑に実施することを目的にリモート授業（リアル配信）、授業録画（欠席者用）を行っている。

② 教育効果

- ・反復学修が可能となることにより、学修効果が高まること。

③ 教員への指導体制・教員の教育力向上

- ・導入研修会、マニュアル作成、サポートチーム設置、および教員間でのサポート
- ・FD研修会での「私のICT活用術」と題して教員による報告会（全員）実施

④ 教員と学生とのコミュニケーション方法

- ・オンデマンド授業での課題提出は、Google Formsを活用して実施した。
- ・質問などは、Google Chatを活用して実施した。

⑤ 評価方法

- ・コロナ禍では、オンライン試験を実施した。試験の工夫では、試験時間内で資料等を見る時間を取れない問題数を設定して実施した。
- ・学生の解答は、学校が配布したiPadの使用を義務付けた。学校配布のiPadはJamfを使って使用を制限するとともに学生のiPad画面をPCで監督した。

⑥ 教育の質への影響

- ・オンデマンド授業、リモート授業では、教員の身振り手振りなど非言語的コミュニケーションが活用できない、また、学生の非言語的コミュニケーションを読み取ることが難しいため言語的コミュニケーションによる授業力が求められ、言語力、説明力向上につながると考える。
- ・課題提出等では双方向性のコミュニケーションが必要になることから、対面授業では聞き出せない学生の意見に対して対応する必要があり、教育力向上につながると考える。
- ・オンデマンド授業では、同じ教材を複数回使用することが可能であり、それを改定もなく使い続ける教員では、教育力が低下すると考える。

⑦ 取り組みによる成果

- ・授業満足度については、遠隔授業導入前後（コロナ禍前後）において大きな変化は認めら

れなかった。

・教員の負担は、動画作成等もあり大きな変化はなかった。

・コロナ禍(オンデマンド授業)及びコロナ後(対面授業, 復習動画)における学修習熟度(試験結果)を比較した。その結果, 習熟度, GPAとも対面授業群とオンライン授業群では有意差はなく, 同等の教育効果を認めることが明らかになった。年齢による層別解析では, オンライン授業は年齢が高くなるに従い習熟度は有意に高くなることが明らかになった。オンライン授業ではあらかじめ作成した動画を授業時間外でも繰り返し視聴できることから, 能動的に学修に取り組める年齢層では効果を認めることが明らかになった。さらに, オンデマンド授業は通学の必要なく, それらを学修時間にあてることができるなど学習環境の影響も考えられた。

GPAによる層別解析では, オンライン授業は対面授業に比較して2.0-3.0未満(中間層)で習熟度が有意に高く, オンライン授業・対面授業ともGPAが高くなるに従い習熟度は有意に高くなることが明らかになった。学修効果は, 学力(GPA)と比例して高まるが, オンデマンド授業という取り組みが特定の学力層(中間層)の習熟度を高めることが明らかになった。(本内容は, (公社)全日本鍼灸学会宮城大会で報告した内容を引用)

⑧ 今後の課題・改善策

・教職員の遠隔授業に対する習熟度や取り組む姿勢, 発展させる姿勢に個人差があること。

・オンデマンド教材を作ると教員は楽になるという概念を組織も教員も持つこと。オンデマンド教材の活用は確かに授業を行うという負担は軽減するが, その分, 適切な学生とのコンタクトやコミュニケーション, 特に学生のモチベーションや取り組みへの指導は, 対面授業より大変になることを理解することが必要であると考えられる。

・研究と同様に教材開発やシステム開発, 適切な指導方法は教員の意欲や考え, それを理解してサポートする組織の姿勢を充実させることが改善策であると考えられる。

・そのためには, 学会や研究会等での事例報告やFD研修会の開催が必要になると考えられ

る。

2) 教員個人単位の好事例に関する質問

①実施のきっかけ

- ・組織としての取り組みに従って実施
- ・組織的な指示はなく自ら提案して実施
- ・学生からの要望によって実施

②目的

- ・反復して講義を視聴することで知識の定着
- ・習熟度の向上が期待できる

③具体的な取り組み

事例)

1年生: 専門基礎分野(解剖学): 講義(15コマ中5コマ)

同時配信型

iPad(goodnote・アトミーアトラス)を利用して実施

アプリを使用しスライドに直接書き込みなどを行い, ライブ感を出すことで学生が聞くだけの講義とならないようにする。

授業内での質疑応答時間の確保, 該当範囲の問題演習を用いたフィードバック

成績優秀者の学習時間については有意に増加が見られた。

オンライン授業を録画し授業後にアップロードすることで学生が繰り返し授業を視聴することができ学習効果, 学生の満足度は高かった。

年齢層の高い社会人学生や成績優秀者においてはオンライン授業を授業後に視聴できる場合は意欲の向上が認められた。

オンデマンド形式ではなくオンライン形式+授業動画をアップロードすることが最善の方法ではないかと考える。

D. 考察

1. 実態調査結果について

本研究は, 全国のあはき師養成施設における, 遠隔授業の実施状況, 導入効果, 課題等を明らかにした。令和6年度において遠隔授業を実施している施設は全体の41.2%で, 実施している場合でもその割合は2割未満の施設が最も多かった。遠隔授業は講義科目のみで導入されており, 実習科目での導入はみられなかった。ま

た、遠隔授業導入にあたり、多くの施設がインターネット設備の投資を行っていた。遠隔授業の形式としては、同時配信型やオンデマンド型等様々な形態が試みられていたが、いずれも「実施していない」という回答が最も多く、遠隔授業は十分に浸透していないことが示された。遠隔授業の教育効果や次年度以降の実施意向については「思う」「どちらともいえない」「思わない」の数に差はなく、遠隔授業についての意見は賛否に分かれるところであることが示唆された。そのことは、実習科目では実施されていないことによると考えられる。実習科目で導入されないことの課題についてはホソアンケート結果からはみられないが、遠隔授業の導入と活用が、実技指導の困難さ、そのための教員の遠隔授業に対する意識やスキル、教育の質保証の観点からの環境整備等、複数の課題を抱えていると考えられる。

遠隔授業の導入が限定的である要因は、遠隔授業の教育効果に対する評価が定まっていないこと、加えて実習科目の実施の難しさが考えられる。あはき師の養成においては、鍼や灸の実践的な技術の習得が不可欠であり、これまで対面での実技指導が重視されてきた。遠隔教育でこれらの技術を効果的に教育する方法は未だ確立されておらず、これらが実習科目における遠隔授業の導入を躊躇させる要因になっていると考えられた。

遠隔教育の実施件数では「基礎分野」と「専門基礎分野」のみで実施されていた。このことは、反転学習が必要である「専門基礎分野」は遠隔授業の適性があるという可能性を示唆している。

「専門分野」の実施は0件であった。これは、専門分野の教育内容、特に実技習得には対面での指導が不可欠なため、遠隔授業の活用が難しい現状が示されていると考えられた。しかし、遠隔教育を補助的に活用することで、学習効果を高める可能性は否定できない。遠隔授業という概念ではなく、対面授業の補助として、模範実技や手技のデモンストレーション動画等の作成を行い、教育の質の向上をしようとする動きも見られる。そのためには、シミュレーションや手技などの動画の開発、またその教材の効果的な活用方法を模索していくことが必要であると考えられる。その延長線上で、実習科目

における効果的な遠隔授業の活用方法を検討すべきである。また、実技を伴う遠隔授業が教育の質を担保できるかを評価するための検証も行っていく必要がある。

遠隔授業の効果について、学生の理解度や学習意欲については「良い」「少し良い」の回答が多くみられたが、教員と学生間のコミュニケーション等に対して「どちらとも言えない」と回答していることは、対面授業でしか得られないコミュニケーションという感覚が相互に存在していることが示唆される。遠隔授業においても対面授業と同等の教育効果を得るためにはそのための方法論に対する教員のスキルアップが重要であり、そのスキルアップのための研修プログラム作成が必要であると考えられる。

教員の意識とスキルの観点から、遠隔授業の拡大に対しては賛否に意見が分かれたことは、教員自身の遠隔授業に対するスキルの差が考えられる。遠隔授業を効果的に実施するためには、教員が遠隔授業の特性を理解し、オンライン環境に適した指導方法を習得する必要がある。単なる対面授業のオンライン化ではなく、遠隔授業の反復学習の容易さや個別学習への対応といった特性を活かした教育方法の開発と実践が求められる。そのためには、教員向けの研修プログラムの充実や先進的な取り組みを行っている施設間の情報共有の促進等、組織的な支援体制の構築を前提に、教員の意識改革とスキルアップに取り組む必要があると考えられる。

本研究は、あはき師養成教育における遠隔授業の現状と課題を明らかにし、今後の活用方法を検討する上で重要な示唆を与えるものであった。遠隔授業を実施する科目や実施内容を適切に選択すれば効果的に遠隔授業を導入することが可能であることも示唆された。しかし、遠隔授業は一部のITスキルが高い教員によってのみ積極的に行われていることがあるのも現状である。また、中学・高校におけるIT教育の発展により、遠隔授業に対して抵抗感がない学生が今後入学してくることから、経年により、本アンケート結果からは今後大きく変化することも考えられる。今後は、定期的な調査の実施により、遠隔授業の活用実態をより詳細に把握するとともに、教育効果や学生の満足度に関

する縦断的な研究を通じ、エビデンスに基づく遠隔授業の活用方法を確立していくことが求められる。

2. 遠隔授業の好事例

今回の好事例から、遠隔授業は、対面授業では実現できない学習機会の提供を可能にし、授業の満足度や理解度を高めることが可能であったことが示唆された。特に授業の復習や、通学時間を勉強に活用できること、欠席をした学生に対しても教育の機会を与えることができると考えられる。しかし、遠隔授業での大きな問題点は、学生の学習意欲の差により、学習効果の差がさらに大きくなることである。そのため学習意欲を高めることができない学生に対する対処については、遠隔授業だけで解決することが難しいため、そのためのフォローアップの方法を検討する必要があると考えられる。

3. 職能団体との連携

医療職種の教育は学校教育だけで完結できるものではなく、卒後教育との連携が必要であると考えられる。あはき師が生涯にわたって学習し、技術だけでなく知識を向上させることにより質の高い治療を提供することができる。現状は、学校教育と臨床現場において乖離がみられることもあることが課題である。そのために臨床現場でのニーズを的確に把握し、実践で求められる知識・技術を習得できる内容であることが求められる。そのためには職能団体との連携は非常に重要であると考えられる。現在、あはき分野においては、定期的な職能団体と学校協会との意見交換会が実施されているが、より教育内容と臨床現場との乖離を少なくするた

めに、密な連携により、教育の質の担保・向上を行っていくことが有効であると考えられる。

E. おわりに

本研究で得られた知見を基に、他の医療関係職種における遠隔授業の活用状況と比較検討することで、あはき師養成教育に特有の課題を明確化し、職種に応じた適切な遠隔授業の活用方法を提案できると期待される。さらに、今後、あはきにおける職能団体と連携し、教育内容について合意形成することで、あはき師学校養成所認定規則の改訂に向けた議論の活性化と遠隔授業の効果的な活用による教育の質向上に寄与することになるものと思われる。

本論文に関連し、開示すべき利益相反はない。

F. 健康危険情報 なし

G. 研究発表 なし

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

1. 属性情報について (計2問)

設問 1-1: 施設にあてはまるものを選択ください。(単一選択)

a) 施設形態

①4年制大学 ②4年制専門 ③3年制短大 ④3年制専門 ⑦その他(記述)

b) 受験資格

①文部科学大臣の指定校(法第12条1号) ②厚生労働大臣の指定校(法第12条1号)

2. 貴学科・コースの現状について (計5問)

設問 2-1: 貴学科・コースの学生全体のカリキュラムにおいて、今年度の遠隔教育はどの程度実施していますか。(単一選択)

1. 全ての授業科目 2. 8割以上の授業科目 3. 5割以上の授業科目で 4. 2割以上の授業科目 5. 2割未満の授業科目 6. 今年度の実施なし

※設問 2-1で、「6. 今年度の実施なし」の回答者への質問は以上となります。

設問 2-2: 貴学科・コースの学生全体のカリキュラムにおいて、分野ごとでみた場合の遠隔教育の実施の割合を教えてください。(単一選択)

a) 基礎分野 (①10割, ②8割以上, ③5割以上, ④2割以上, ⑤2割未満)

b) 基礎専門分野 (①10割, ②8割以上, ③5割以上, ④2割以上, ⑤2割未満)

c) 専門分野 (①10割, ②8割以上, ③5割以上, ④2割以上, ⑤2割未満)

設問 2-3: 貴学科・コースで導入にあたり、追加準備が必要であった設備は何ですか。(複数回答可)

1. パソコンやタブレット(指導者用) 2. パソコンやタブレット(学生用) 3. 周辺機材(マイク, カメラなど) 4. インターネット環境 5. 学科・コースとしては特になし 6. その他(記述)

3. 遠隔教育を最も実施している(主にオンラインで実施している)授業科目の実態について (計15問) ※

貴学科・コースのカリキュラムから1つを選択して回答ください。

設問 3-1: 教育内容の分野を教えてください。(単一選択)

1. 基礎分野 2. 専門基礎分野 3. 専門分野

設問 3-2: 授業科目を教えてください。(単一選択)

1. 講義科目 2. 演習科目 3. 実習(実技)科目 4. 課程外の科目 5. その他(記述)

設問 3-3: 遠隔教育の形式を教えてください。(単一選択)

a) 同時(リアル)配信型

(①授業のすべて ②授業の7割以上 ③授業の5割以上7割未満 ④授業の3割以上5割未満 ⑤授業の1割以上3割未満 ⑥1割未満 ⑦実施していない)

b) オンデマンド型

(①授業のすべて ②授業の7割以上 ③授業の5割以上7割未満 ④授業の3割以上5割未満 ⑤授業の1割以上3割未満 ⑥1割未満 ⑦実施していない)

c) ハイブリッド(ブレンド)型

(①授業のすべて ②授業の7割以上 ③授業の5割以上7割未満 ④授業の3割以上5割未満 ⑤授業の1割以上3割未満 ⑥1割未満 ⑦実施していない)

d) ハイフレックス型

(①授業のすべて ②授業の7割以上 ③授業の5割以上7割未満 ④授業の3割以上5割未満 ⑤授業の1割以上3割未満 ⑥1割未満 ⑦実施していない)

e) 対面+オンデマンド

(①授業のすべて ②授業の7割以上 ③授業の5割以上7割未満 ④授業の3割以上5割未満 ⑤授業の1割以上3割未満 ⑥1割未満 ⑦実施していない)

f) その他(記述)

設問 3-4: 教育の質の観点から、当該授業科目において遠隔教育を導入することでの適否意見を以下の視点で教えてください。(単一選択※fのみ記述)

a) 学生の授業内容の理解度への影響

(①良い ②少し良い ③どちらとも言えない ④少し悪い ⑤悪い)

b) 反復学習への影響

(①良い ②少し良い ③どちらとも言えない ④少し悪い ⑤悪い)

c) 学生とのコミュニケーションによる影響

(①良い ②少し良い ③どちらとも言えない ④少し悪い ⑤悪い)

d) 学生の学習意欲による影響

(①良い ②少し良い ③どちらとも言えない ④少し悪い ⑤悪い)

e) 教育の機会均等への影響

(①良い ②少し良い ③どちらとも言えない ④少し悪い ⑤悪い)

f) その他(記述:任意)

設問 3-5: 学生の学習成果をどのように評価していますか。(複数回答可)

1. 対面試験(論述・口頭・客観試験) 2. オンライン試験(論述・口頭・客観試験) 3. レポート提出 4. 実地(実技)試験 5. その他(記述)

設問 3-6: この授業は次年度以降もオンラインでの実施が良いと思いますか。(単一選択)

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらともいえない 4. あまり思わない 5. 思わない 6. その他(記述)

設問 3-7: この授業以外にもオンライン授業を増やすべきですか。(単一選択)

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらともいえない 4. あまり思わない 5. 思わない 6. その他(記述)

4. これまでに遠隔教育を実施し、学生の習得度に最も効果的であったと感じている授業科目の実態について(計 15 問) ※貴学科・コースのカリキュラムから 1 つを選択して回答ください。

設問 4-1: 教育内容の分野を教えてください。(単一選択)

1. 基礎分野 2. 専門基礎分野 3. 専門分野

設問 4-2: 授業科目を教えてください。(単一選択)

1. 講義科目 2. 演習科目 3. 実習(実技)科目 4. 課程外の科目 5. その他(記述)

設問 4-3: 遠隔教育の形式を教えてください。(単一選択※ f のみ記述)

a) 同時(リアル)配信型

(①授業のすべて ②授業の 7 割以上 ③授業の 5 割以上 7 割未満 ④授業の 3 割以上 5 割未満 ⑤授業の 1 割以上 3 割未満 ⑥1 割未満 ⑦実施していない)

b) オンデマンド型

(①授業のすべて ②授業の 7 割以上 ③授業の 5 割以上 7 割未満 ④授業の 3 割以上 5 割未満 ⑤授業の 1 割以上 3 割未満 ⑥1 割未満 ⑦実施していない)

c) ハイブリッド(ブレンド)型

(①授業のすべて ②授業の 7 割以上 ③授業の 5 割以上 7 割未満 ④授業の 3 割以上 5 割未満 ⑤授業の 1 割以上 3 割未満 ⑥1 割未満 ⑦実施していない)

d) ハイフレックス型

(①授業のすべて ②授業の 7 割以上 ③授業の 5 割以上 7 割未満 ④授業の 3 割以上 5 割未満 ⑤授業の 1 割以上 3 割未満 ⑥1 割未満 ⑦実施していない)

e) 対面+オンデマンド

(①授業のすべて ②授業の 7 割以上 ③授業の 5 割以上 7 割未満 ④授業の 3 割以上 5 割未満 ⑤授業の 1 割以上 3 割未満 ⑥1 割未満 ⑦実施していない)

f) その他(記述)

設問 4-4: 教育の質の観点から、当該授業科目において遠隔教育を導入することでの適否意見を以下の視点で教えてください。(単一選択※ f のみ記述)

a) 学生の授業内容の理解度への影響

(①良い ②少し良い ③どちらとも言えない ④少し悪い ⑤悪い)

b) 反復学習への影響

(①良い ②少し良い ③どちらとも言えない ④少し悪い ⑤悪い)

c) 学生とのコミュニケーションによる影響

(①良い ②少し良い ③どちらとも言えない ④少し悪い ⑤悪い)

d) 学生の学習意欲による影響

(①良い ②少し良い ③どちらとも言えない ④少し悪い ⑤悪い)

e) 教育の機会均等への影響

(①良い ②少し良い ③どちらとも言えない ④少し悪い ⑤悪い)

f) その他(記述:任意)

設問 4-5: 学生の学習成果をどのように評価していますか。(複数回答可)

1. 対面試験(論述・口頭・客観試験) 2. オンライン試験(論述・口頭・客観試験) 3. レポート提出 4. 実地(実技)試験 5. その他(記述)

設問 4-6: この授業は次年度以降もオンラインでの実施が良いと思いますか。(単一選択)

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらともいえない 4. あまり思わない 5. 思わない 6. その他(記述)

設問 4-7: この授業以外にもオンライン授業を増やすべきですか。(単一選択)

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらともいえない 4. あまり思わない 5. 思わない 6. その他(記述)

図 1. あん摩マッサージ指圧師はり師きゅう師養成における遠隔教育の実態の調査内容